

【特集】
慰安婦・歴史戦争、
我らの反撃

深層解剖

元日本人慰安婦を

「性奴隷」にした嫌らしい面々

日本軍相手の慰安婦だったことを名乗り出た数少ない日本人女性「性奴隷」として紹介される彼女の周囲の人々の「正体」は？

ジャーナリスト・おたかじみき

大高未貴



「私は彼らの奴隷だった」

日本軍の「慰安婦」像が設置された米カリフォルニア州グレンデールの図書館で2013年、韓国人口ビイストたちによって慰安婦関連のパネル展が開催されていた。その中でひと際目を引いたのが、唯一の日本人女性として写真入りで登場した一枚の写真だった。Shirota Suzuko “I was their slave” (私は彼らの奴隷だった)とあり、説明書きの英文はこう続く。

「1938年、城田すず子さんは17歳の時、父親に借金返済のため日本軍に身売りされた。戦争が終わるまで城田さんは台湾やサイパンの慰安所で働き日本軍の性奴隷となった。1955年から城田さんは性暴力被害者の救済施設に20年間住み、1971年に「慰安婦」としての自伝を出版」

しかし、この紹介文は、事実が大きく歪曲されている。城田すず子さん(ペンネーム)の自伝「マリヤの賛歌」(日本基督教団、以下「マリヤ」)

していた。その過程で進駐軍将校のオンリーとなり、彼が帰国すると同時に捨てられ、自殺未遂を引き起こしている。この事実を隠蔽していることから、城田さんの政治利用の目論見は明らかだ。アメリカでアピールする、日本軍に強制連行された性奴隷が、米軍将校のオンリーだったのではプロバガンダが成立しない。

「マリヤの賛歌」については、かつて本誌で紹介したことがある(平成25年8月号「正論壁新聞・元日本人慰安婦の手記」)。

城田さんは、晩年を千葉県南房総にある「かにた婦人の村」という保護施設で過ごした。性産業などに従

大高未貴さん 昭和44(1969)年、東京都出身。フェリス学院大学卒業。世界100か国以上を訪れ、グライ・ラマ14世、PLOのアラファト議長にインタビューする。日本文化チャンネル桜キヤスター。著書に「日韓・円満・断交」(ワニブックス)など。

事した女性の社会復帰や老後をケアする施設である。そこに建つ「噫(ああ)従軍慰安婦」と刻まれた石碑は、城田さんの願いによって86年に建てられたものだ。

07年に私が訪れたとき、案内してくれた理事長が、「城田さんは「兵隊さんや従軍看護婦には靖国神社がある。しかし私たちには何もない。このままではモノも言えず死んでいった多くの仲間たちの霊が浮かばれない」とよく言っていました」と話してくれた。私はただ石碑の前で黙

待を捧げるのみだった。

城田さんの写真は、2000年にあの「女性国際戦犯法廷」を開いたVAWWINET(バウネット)ジヤパンの「女たちの戦争と平和資料館」(東京・西早稲田)で、日本人「従軍慰安婦」の象徴として掲げられている。韓国の「ナムヌの家」(元慰安婦達が住んでいるといわれている)に併設された資料館にも登場する。

左翼のプログでは、「マリヤ」の都合の良い部分だけをつまみ食いの紹介し、「この本は既に絶版になっていて版元にもない」などと記されている。しかし私が昨年、かにた村を再訪した際にも在庫があり、すんなり購入できた。結論から先に言えば、慰安婦のプロバガンダを推進したい人たちにとって、城田さんの置き土産「マリヤ」は実に都合の良い真実が書かれているのだ。日本政府はただちにこの本を英訳し、「それでも彼女を、性奴隷」と認定します



韓国の元慰安婦施設の資料館に展示されていた城田すず子さんのパネル

か？」と国連に正面から問いかけるべきだ。

悲しくも逞しい女の物語

『マリヤ』は71年に初版本が出されているので、83年刊行の吉田清治著『私の戦争犯罪―朝鮮人強制連行』（三一書房）に端を発する慰安婦プロパガンダが展開される以前のものです、その意味でも第一級の資料として読み解くことができる。17歳で親に芸者置屋に売られ、公娼として台湾、サイパン、トラック島、パラオと流れ、戦後は米兵相手に春をひさいだ哀しくも逞しい女の物語だ。

もちろん、無理やり日本軍に連行され、強姦された。などという記述はどこにもない。とはいえ、横浜の遊郭から台湾の遊郭に移った日の翌日には、妓楼の主人と一緒に娼妓として働く手続きをして「名実共に奴隷の生活が始まりました」「普通の日は泊りを一人とれば良いほうでしたが、土日となると、列をつく

り、競争で遊ぼうとしました。（略）一人の女に十人も十五人もたかるありさまは、まるで獣と獣との闘いでした」という記述もあり、城内からの外出もままならなかった上に、半年働いても借金が減っていないかったと壮絶な記録もある。

しかし一方で、台湾時代に出会った日本軍兵士との淡い恋物語も告白している。のちにサイパンで再会した彼を追い、城田さんはトラック島にと移るのだ。

南洋での生活は、それほど悲壮感漂っていない。「サイパンでの生活はのんびりしていました。南洋の空のように朗らかで、金銭の苦勞もあまりしない、贅沢三昧の生活でした」とある。ずっと遊郭にいたわけではなく、トラック島では斃節工場を経営する社長の二号に収まって奥さんのような生活も満喫。パラオでも料理屋の主人の三号になり入籍もしているが、終戦後、本妻、二号と一緒に船で浦賀に戻り、女性三人と

男一人と従業員との奇妙な同居生活をしている。

この生活にも見切りをつけ、隙を見て夫の筆筒にあった5千円や時計などもかき集めて懐に入れ、東京駅から博多行の夜行列車に飛び乗って家出。見つかったら半殺しの目にあうかもと恐れながらも、「女だもの、どこへ行ったら体一貫持っていれば何とか暮らせる」とウイスキーを飲みながら新天地へと向かうのだ。

博多ではしばらく遊んで暮らすのが、ヒロポン（覚醒剤）と賭博を覚え、売春を繰り返して、米兵相手に「じゃんじゃん」稼ぎまくるのだが、8カ月同棲した米軍将校が帰国して自殺未遂をする。しかし日本各地を転々としながら熊本では彼女を愛する年下の学生の男に巡り合い、二人で東京の下町に駆け落ちして心中を図るが、相手だけが死んでしま

う。「マリヤ」の読後感を一言で表現す

るなら、城田さんの生命力の力強さには同じ女として脱帽だ、ということだ。家族のために身売りされ、苦界で生きねばならなかった悲劇は否定できないが、遊郭を転々とする中、様々な男たちが彼女を助け、多額の金を援助する場面もある。しかし、宵越しの金は持たない主義なのか、洋服や賭博などですぐ散銭してしまうのだ。こうした生き方ができたのは、城田さんにとこ憎めない、魅力があったのではなからうか。随所にみられる兄弟思いの描写が、彼女が持つ優しい一面を哀しいほどに描いている。

なぜ、従軍慰安婦の象徴に？

悲劇ではあるが、したたかに力強く生き抜いてきた城田さんが、なぜ日本を代表する「慰安婦」ではなく「従軍慰安婦」の象徴として語られることになったのか。その謎を読み解く鍵が、86年にTBSラジオで放送されたニューススペシャル「石の

叫び」ある従軍慰安婦の記録（NPO法人・安房文化遺産フォーラムHP収録のテープ起こし原稿より）だ。

TBSラジオニュース部の記者、カミノノオサムなる人物が、「石の叫び」という手記を書いた城田さん（ここではミハラヨシエさん）取材をしているのだが、この時の城田さんのラジオでの証言と71年の「マリヤ」では所々内容が異なり、いわゆる「強制連行的」傾向の強い証言になっているのだ。

例えば、TBSラジオでは「台湾行きの船には、ヨシエさんと同じような事情で売り飛ばされた女性たちが船底にひしめき合うように乗り込んでいました」というナレーションがあり、城田さんはこう証言する。

「もう、ほんとになんというのかね、哀れなもんだね、船だつてさ、高砂丸という船だつていうんだよ。最初はなんだか分からないでしょ。そんな卑しいことしに行くとは

思わないしさ。行ったところが、船の底の、私たちは鎖こそかけられちゃいないけど奴隷だよ、ああいうときや。そのとき、店からも行ったし、ほうほうの遊郭からも、あんとさ、15、6人かねえ、とにかく団体だよ。だけどね、あたしが一番若かったの」

これだと、遊郭に売られるとも知らず船で強制連行されたような印象を受けるが、「マリヤ」では横浜の「芸妓周幹業大和屋」から台湾の遊郭を斡旋され、父に相談した上で「台湾行きを承諾しました」とあり、横浜駅まで泣きながら見送りにきた父と別れて、斡旋業者と売られた女性達と一緒に神戸経由で台湾へと向かっているのだ。

また、TBSラジオでは城田さんが24歳の時に借金返済のためパラオの慰安所に行ったと紹介され、その時の様子を城田さんは「内地も空襲受けるっていう噂も出てきたのね。本土襲撃だなんていう噂も出てきた

でしょう。どうせ死ぬんならね、兵隊さんのために役立つてね、死んだほうがお国のためになるというような馬鹿な気持ちを起こしちゃったの。それでね、今度はね、南洋群島にパラオからね、トクヨウ隊だつてね、女の子を募集しにきてたの。それを耳にしたのよ、私が。食うに食わないでね」と証言している。

しかし著書では、パラオに行ったのは、トラック島で二号になった艦節工場の社長から、戦局も怪しくなってきたので「また戻ってもいいから一度東京に行って様子をみてきなさい」と言われ、東京へ戻ったものの行くあてもなく、水商売も嫌なので、再びパラオ経由でトラック島の社長のところへ戻ろうとしたとある。ところが、パラオで戦争に巻き込まれトラック島に渡ることもできず、結局、偶然宿泊した特別料理屋兼旅館・紅樹園(マンガローブ)の経営者の三号となって、店の帳面付けや特要隊の女子の世話係をしてい

たのであって、売春はしていない。そして前述したように戦後は経営者や2人の女性たちと帰国するのだ。

ところがTBSラジオのナレーションは、「従軍慰安婦は慰問隊、女子挺身隊、トクヨウ隊などの名称で集められました。しかし、その名前の持つ響きから女性の中には、兵隊の前で歌を歌ったり、踊りを踊ったり、洗濯や炊事の仕事をすると信じて船に乗り込む人も少なくなかったと言われています。ヨシエさん(城田さん)たち特要隊が乗り込んだ船は、周りを駆逐艦に守られながら南洋へと向かいました。10日間の航海の後、ヨシエさんが見たものは、南洋群島の中心地パラオ諸島コロールの美しい町並でした。ヨシエさんたちは船から降りると、兵隊たちの熱い視線を浴びながら、慰安所へ連れて行かれました」などと慰安婦として紹介され、女子挺身隊「従軍慰安婦」という、かつて朝日新聞も誤報した事実無根のプロパガン

体を回収しにきた伝保部隊の兵隊さんたちを手伝ったことから、紅樹園の人たちだけコロール島に残るのを許され、日本軍と一緒に戻って紅樹園農耕班を作つてとうもろこしやさとうきびなどを作る。兵隊さんから金平糖や、お汁粉のようなものを配給してもらい嬉しかったという感想も含め、3〜4カ月の間、日本軍と協力しながらサバイバルしたことが書かれている。慰安所ができたのは1945年正月を過ぎた頃からだ。

「ジャングルに陸海軍の生き残った兵隊さんや、高級な技術を持った軍属さんが皆避難していたので、その人たちの慰安のために慰安所を開こうという話が部隊から出た」「紅樹園の支店のようなものができた」と「マリヤ」にあり、城田さんはそこで「おかみさん」として働き、軍属と話しているだけで、夫だった内田氏からやきもちを焼かれるような生活をしている。ところがTBSラジオではこの時の生活を城田さんはこ

う証言している。

「椰子の木だとかさ、アンペラだとかみんな集めてね、慰安所を作つたの、川の流れてるところに。それで、その所で死んだ人なんかいるわけ。もう、女の人は惨めだったわよ。お。ほんとに惨めだったわよ。でね、もう、水兵さんだつてね、もう、瘦せつこけてね、骨と皮ばかりになってウロチョロして、やつぱり、女の人のところに来るわけよ。もう、そんな骸骨に襲われてごらんなさい、気持ち悪いわよ。ねえ。それでね、自殺しちゃった女の子がいっぱいいるのよ。とっても耐え切れないちゅつて」

骸骨のような日本軍が慰安所に来てシヨックで自殺した女の子の話はかなりシヨッキングだが、このような話が著作に出てこないのは不思議だ。

更にTBSラジオは、従軍慰安婦物語の捏造を認めた「詐話師」吉田清治まで登場させ、「戦争中山口県

夕用語も使われている。城田さんは日本に一時帰国する際、艦節会社の社長から「相当のお金をもらっていた」と「マリヤ」にあるので、何もパラオで売春する必要はなかったのだ。

更にTBSラジオのナレーションはこう説明する。「戦火を逃れるため、ヨシエさんたちのいた慰安所は部隊とともにジャングルへ移されました。そこでヨシエさんたち慰安婦に待っていたのは、想像を絶するような悲惨な生活でした」

しかし「マリヤ」では次のように書かれている。紅樹園があったコロールが米軍に空襲され、城田さんは経営者と本妻、二号、紅樹園の人たちと一緒にジャングル奥地の洞窟に逃げ込んだ。その洞窟の上は偶然、陸軍の高射砲陣地で、日本軍との接触が始まる。きっかけは基地が爆撃され40〜50人いた兵隊さんたちが1人を除いて全員戦死してしまい、周囲一帯に飛び散った肉片となった遺

下関の労務動員部長だったヨシダさんは朝鮮半島から1000人以上の朝鮮人女性を強制的に連行し、従軍慰安婦として戦地に送り込みました」などとナレーションしたあと、吉田がこう証言している。

「まず、朝行きますと、村を完全に包囲するわけです。そして逃亡できないようにしておいて、未婚既婚を問わず、20歳前後の若い女を全部、道路に並べる。そして座らせるわけです。女性だけの徴用は、これが慰安婦にさせられることが、口コミで完全に朝鮮中に広まっています。(昭和)18年の秋ぐらいいなくなります。だから、それは大変なんです。若い娘は半狂乱で逃げ回るから。殴りながらトラックに放り込むという形なんです」

「奴隷狩りみたいなものです。ええ、もちろん。女を500人、4〜5日で集めるとすれば、これは奴隷狩り以外の方法では集めようがありません」

吉田清治を登場させてまで従軍慰安婦の悲惨を訴えるTB Sラジオの企画構成は、初めに結論ありきのものだったのではないだろうか。

果たして誰の言葉なのか

城田さんをめぐっては、このTB Sラジオをはじめ慰安婦反日活动派が必ず引き合いに出す「女の地獄」という言葉がある。それは、「石の叫び」という次のような一文に登場する。

「兵隊さんや民間人のことは各地で祭られるけど、中国、東南アジア、南洋諸島、アリューシャン列島で、性の提供をさせられた娘たちは、さんざん弄ばれて、足手まといになると、放りだされ、荒野をさまよい、凍りつく原野で飢え、野犬か狼の餌になり、土にかえったのです。(中略)兵隊用は1回50銭か1円の切符で行列をつくり、女は洗うひまもなく相手させられ、死ぬ苦しみ。なんと兵隊の首をしめようと思ったこと

か、半狂乱でした。死ねばジャンケルの穴にほうりこまれ、親元に知らせる術もない。それを私は見たのです。この眼で、女の地獄を……

40年たっても健康回復はできずにいる私ですが、まだ幸いです。一年ほど前から、祈っていると、かつての同僚がマザマザと浮かぶのです。私は耐えきれません。どうか慰霊塔を建ててください。それが言えるのは私だけです」

この「石の叫び」は「マリヤ」が1985年に増刷された際、深津文雄という牧師が書いた後書きの中に登場する。深津牧師は戦後、城田さんのような慰安婦らの厚生施設「いずみ寮」や「かにた婦人の村」を創設した。城田さんにとっては救世主だ。したがって深津牧師が後書きを加筆するのは不自然ではない。

しかし、城田さんの言葉とされている「石の叫び」を記述するならば、深津牧師は城田さんから直接聞いたのか、彼女から手紙を貰ったのか、

または彼女が独自に発行した手記なのか、何らかの形で出所を明記するのが普通なのだが、何の説明もなく「マリヤ」では突如この文章が出てくるのだ。

「かにた婦人の村」発行の当時の新聞には、城田さんから深津牧師への手紙とあるものの、同村のシスター天羽道子さんに何度か問い合わせしても「確か城田さんが書いたものです」というばかりで、自筆の手紙を見せていただくことはなかった。

もし本当に自筆の手紙があるのなら、まっ先にパウラック（「戦争と女性への暴力」リサーチ・アクショントン・センター、パウラックの後継団体）が展示するはずだ。パウラックは幾枚もの城田さんの手紙を同村から借りて、展示したり小冊子に掲載したりしているのだが、肝心な「女の地獄」の手紙がどこにも見当たらない。城田さんの悲劇をPRしたければ、この手紙一枚出すのが最も効果的でインパクトが強いことくらい

誰でもわかるはずだ。

本当に城田さんの言葉なのか、それとも深津牧師が彼の歴史観やイデオロギーをまじえながら、彼女ならこう言うだろうかと想像して書いたものなのか、正直、判断つきかねるのだ。

話はそれるが、城田さんが南洋で「女の地獄」を見ていないことを偶然にも別の書籍から推認することができた。それは山田盟子氏によって書かれた「慰安婦たちの太平洋戦争」（光人社）の後書きにある。慰安婦による日本糾弾キャンペーンが猖獗を極めていた95年に出されたもので、「女版・吉田清治登場だ！」と叫びたくなるほど、日本軍を悪しざまに描く記述に満ち溢れている。例えば「兵たちは私娼や慰安所通いで性病にかかると、いきおい、狂気の魔法を欲した。特効薬として生きた人間の脳味噌や肝を欲しがった」などと。

そしてこの本は城田さんの「マリ

ヤ」が骨格となっていて、それが随所に見てとれる。更に山田氏は「マリヤ」をさんざん利用しながら、最終章で館山のかにた村で余生を送る城田さんを訪ねたところで筆を措いているのだが、その内容がまた仰天だ。たった5分の面会しか許されていないので、人なつっこい安らかな微笑をみせて山田氏を出迎えた城田さんを、娼婦盆栽、などと表現し、彼女にいきなりこう切り出すのだ。

「あなたが碑（従軍慰安婦の碑）を建ててくださったありがとうございます。私もお参りさせていただきました。ひよっとしてあなたはパラオの前にいたトラック島で、昭和19年2月17日、18日の激しい空爆後、ある壕内の慰安婦がまとめ殺しにあった事実を知っていたのですか？」

「そ、そのこと……本当ですか？」
「現地司令官から、殺しの命を受けたのはS少尉です。二人の兵に女たちは娼婦なのだ、それに島の玉碎に女たちは足でまといになるし、上

陸する米軍に知られては恥だとか、そのような考えを示したようでした。殺された女は関西の慰安婦です（以下略）」

私は西口克己の「廓」で書かれた慰安婦を語った。

彼女は急に身をよじった。その暗い過去を語る細いひからびた手が、こぶしになって空におどった。

「あたし！ 兵隊は女を殺すと思っただわ！」

唇をわなつかせて彼女は叫んだのだ。

ここでシスターが間に入り、面会は終わる。山田氏が城田さんに面会したのは、慰安婦の碑が建った1986年から山田氏の著作が出版される95年より数年以前までの間ということになる。つまり城田さんは、この時まで南洋諸島での「女の地獄」を知らなかったということになる。もし本当に深津氏が後書きに付け加えた城田さんの手紙と称する、「なんと兵隊の首をしめようと思ったこ

とか、半狂乱でした。死ねばジャン
グルの穴にほうりこまれ、親元に知
らせる術もない。それを私は見たの
です。この眼で、女の地獄を……と
いう記述を城田さんが書いたとした
ら、山田氏の質問に「そのこと、本
当ですか？」と驚くはずがない。

更に驚くべきことに、山田氏が城
田さんに突き付けた『廓』なるもの
を読んでみると、著者の西口氏は共
産党員であり、『小説』として出版
されたものだった。小説の題材をあ
たかも歴史の真実であるかのように
語りかけ、城田さんに情報を吹き込
み、彼女の動揺ぶりを著書のクライ
マックスに使う山田氏はなんと卑劣
なジャーナリストなのだろう。

更に私は城田さんの足跡を追って
南洋諸島にわたった日本人慰安婦た
ちに聞き書きをしている広田和子氏
の『証言記録 従軍慰安婦・看護
婦』（新人物往来社）を読んでみた
のだが、この本は75年に出版されて
いるだけに脚色が少なく、南洋諸島

の章はほぼ事実であろうと推定でき
る。この本に書評を寄せた本田靖春
氏はこう述べている。「従軍慰安婦
として過ごした日々を『仕合せ』で
『楽しいことばかり』だったと回想
する女性の自殺から、本書は書き起
こされている。彼女が呪ったのは、
南の島での生活ではなく、戦後の世
の中ではなかったのかと見据える視
点は鋭い（以下略）」

もちろん下士官相手の慰安婦たち
に苦勞がなかったといえれば嘘にな
るが、それにしても城田さんにして
も広田氏の著書に登場する女性達に
しても、南洋諸島では男性たちに大
にされ、恋愛や求婚もされたとい
う記録が残っている。これを一概に
『性奴隷』というカテゴリーに押し
込めることは無理ではなからうか。
はっきり言えるのは、吉田清治ら
の登場以降に出てきた「石の叫び」
（85年）やTBSラジオでの証言
（86年）は、いわゆる教科書誤報事
件（82年）などの影響もあり、国民

が『従軍慰安婦』や『南京大虐殺』
があったと信じていた時代のもの
だ。それに対する冷静な検証も反論
も許されなかった。日本人が冷静に
反論を試みる事ができるような
ったのは、皮肉なことに2013年
にアメリカで慰安婦の碑が建ち始
めたからのことだ。71年に出された
『マリヤの賛歌』が、従軍慰安婦
ロバガンダ推進論者たちにとって都
合のいいように脚色、利用された
という事は十分に考えられる。

1962年刊の『愛と肉の告白』

この原稿を書きながら城田さんと
日本人慰安婦の軌跡を国会図書館で
調べてゆくうち、なんと『マリヤの
賛歌』よりも9年早く出版された城
田さんの自伝『愛と肉の告白』（桜
桃社を発見し、その内容を読んで
更なる発見をした。

『マリヤ』は『愛と肉の告白』（以
下『告白』）のほぼ複製版といつて
も過言ではないのだが、『マリヤ』

で恣意的に削られている部分が多々
ある。一言で説明するならば、城田さ
んの人間としての生々しい感情が削
除されているのだ。従軍慰安婦プロ
バガンダ推進者にとつて、城田すず
子が主體的に売春婦としての自分の
人生の宿痾と戦ってきた事は不都合
な真実であり、日本軍加害者、城
田すず子被害者という構図を作り
上げるため、それを削除する必要が
あったのだ。『愛と肉の告白』はこ
のようにはじまる。

「『ヘイ・ジュリー』

わたしは今日も夢の中で、だれか
にこうよばれて、はっと眠りからさ
めた。はずかしい過去が、急によみ
がえってきて、もうふたたび燃える
ことも、濡れることもなくなったわ
たしのからだに、かなしみだけが、
じわじわと押しよせてきた。できる
ものなら、子どものようにわたしは
大声で泣きたくなってしまう。

数年前までのわたしは、けもの
のように挑みかかってくる男を、つき

つきに満足させてやることのできた
パンパンだった。自分には、肉体の
満足も感覚もないときでも、いろん
な姿態や技巧をつかって、けっこう
男をよろこばしてやることもでき
た。台湾からサイパン、日本国中を
わたり歩いて、わたしは骨のズイマ
でしみとおった商売女だったのだ
……」

それでは『告白』が『マリヤ』に
書き直されるにあたって恣意的に消
されている部分を紹介してゆこう。
例えば、台湾で城田さんが働いてい
た遊郭に遊びにきた海軍の上等兵と
はサイパンで再会を果たし、この時
はじめて男女の関係になるのだが、
その時の気持ちをこう表現してい
る。

「どこまでも勝力（注・上等兵の乗
っていた軍艦）の行方を追いながら
かれとの逢瀬を楽しみたい。焼けほ
つくいに火がついたようにわたしの
心は燃えるのだった。はじめてつか
んだ、女の心と体の幸福をとり逃が

すまいと、必死になっていく自分が
はつきりと分かるのだった」

娼婦でありながら、時に相手の男
性に恋愛感情を抱き、その気持ちを
素直に表現している部分が、『マリ
ヤ』では、上等兵を追ってサイパン
からトラック島まで渡ってきた際に
「結局私は何のためにトラックにき
たんだろうか。一人悶々としてその
心の奥を探ってみれば、ほんとうは
私は何も『上等兵（著作では実名）』
でなくてもよかった。ただ愛情がほ
しかったのだということが、その時
はつきりと分りました」とやけに冷
めた目線になって描かれている。

また、たとえ二号であろうと、サ
イパンで出会った鏗節会社の社長と
結婚した際のこともこう回顧してい
る。

「あらゆる男に、モミクチャにされ
たわたしのからだだけだと、結婚初
夜のようなウブな気持ちにかえるの
だった。私の肌は荒れているけれど、
しずかに抱かれていると、純愛がよ

みができるのだった。(中略)わたしは生まれてはじめて家庭を持ったが、ご飯の炊きかた、おかずの作りかたひとつ知らなかった。それでも別に苦にならなかった。本妻のいない主人と二人きりの生活はまるで夢のようだったからだ」(「告白」)

パラオでは慰安所の帳簿係をするのだが、そこで働いていた朝鮮人慰安婦の実態についても「マリヤ」では消されている。

「慰安婦たちは朝鮮と沖縄の人ばかりで、内地人は一人もいなかった。わたしは毎晩六時から帳場でチケットを売った。二十人の慰安婦には、名前がわりに一連番号がついていた。(略)五番の妓は朝鮮出身だったが、わりとふっくらした顔でいつも混んでいる妓だった。このあいだの日曜日には四十三人のお客をとったといつて、おかみさんから、一円札を何枚か手渡されてほめられていた妓だった。

まよい、凍りつく原野で飢え、野犬か狼の餌になり、土にかえった」との描写は見当たらない。

削られた真実の訴え

「告白」も「マリヤ」も、後半は城田さんの更生の物語だ。キリスト教団体が運営する婦人保護施設に入ってから、自分と同じような境遇の女性たちが安定した生活ができる施設をつくることと、パン屋を立ち上げ自活の道を模索するプロセスなどが書かれている。

「マリヤ」ですっぱり抜け落ちていく部分は、当時の売春禁止法制定に向けての社会情勢と、法案に反対する遊郭などの業者や国会審議の混迷ぶり、せっかく売春から足を洗ってまともに働こうとしても就職先から全部断られ、「あの苦い経験で、売春稼業を私は心の底から憎んだものだ」という城田さんの売春婦としての葛藤や過去との決別の部分だ。

「あわてんぼうがいてね、ズボンも脱がないんだからねえ」

と、その朝鮮の妓がおかみさんにいって、二人が廊下で大笑いしていた」(「告白」)

パラオのジャングルでの「女の地獄」はこう書かれている。重要な部分なので長く引用する。

「軍属の工作班が、ジャングルの一部をきり開いて掘建小屋のような慰安所を作った。形ばかりの炊事場、フロ場も設けられ、わたしはふたたびその「女将」になった。(略)喜々としてやってくる兵隊や軍属の「便所」の管理人―それがわたしなのだ。慰安婦たちも、ただ呼吸するのがせいっぱいなのだ。目がくぼんでやせ衰えた彼女たちの上に、兵隊たちは野獣のようにのしかかる。部屋というよりは小屋だった。板ひとつ使わずに、ジャングルからとってきた大きな葉を二重ぐらにかさねて、草つるで編んだのがとなりを

そして性病に侵され入院している時に、父と弟、義母が見舞いに来る場面。貧しいながらもちゃんと成人した弟と仲良く暮らしている家族を見て嬉しい半面、「無慈悲な親だと、わたしはなんだろうらんだことか。そんな無慈悲な親を、それでもなんとかむかしの幸福な家庭に戻したいばかりに、わたしは盲目的に肉体を切り刻んできた。無知がそうさせたと知ったのは、すでにわたしの肉体が病魔に犯されてしまったあとだった。(略)それでもいまの親子の姿をみて、わたしの犠牲がけつしてむだではなかったのかもしれないと、みずから慰めた」という率直な感情が落とされている。

病気のせいで婦人科系の臓器を全部とってしまった場面も「マリヤ」は「一生生理がこない」と先生に言われ、がっかりした」とさりと書いてあるが、「告白」には「一生あなたには生理はないのよ」「一生……」

へだてる境になっていた。葉がよって、すきまだらけだった。

それでも、兵隊や軍属は、朝早くから行列して自分の順番を待っていた。夕方、兵隊たちが帰ってしまうと、夕食をするまもなく将校やえらい軍属たちがたくさん集まってきた。いままで一回も遊びにきたこともなかった、大学の中で技術の将校になったという若い少尉さんまできた。チケットを渡しながら、わたしがおどろいたような顔を見ると、「もう死ぬんだよ、ぼくは。どうせ内地には帰れないからださ」と、その少尉は、笑いもしないで小屋のなかに入っていった」(「告白」)

極限状態における慰安所の実態が生々しく書かれている。壮絶な描写にせよ、先に記した「マリヤ」の後書き「女の地獄」に書かれているような、「性の提供をさせられた娘たちは、さんざん弄ばれて、足手まといになると、放りだされ、荒野をさ

や赤ちゃんは生めないです」先生はこくりとうなずいた。女の機能をうしなつたかなしみよりも、これから先、たとえ愛する人ができて、その人の子どもを生めない、母親になれないということのかなしみのほうが深かった」と城田さんの率直な悲しみが描かれている。

子供を産みたいのに産めないという女性の苦悩、肝心要の部分、なぜ「マリヤ」はスッポリと落としたのか、私には理解できない。売春の代償がかくも大きなものだということ、この職業の悲劇性を城田さんは伝えたかったはずだ。

それから、当時、週刊誌に発表された城田さんの手記を読んだ男性の求婚を、「マリヤ」では深津牧師のアドバイスで断つたように書かれているが、「告白」では所帯を持ちたいという誘惑にかられたものの「週刊誌に書かれた手記に同情してわたしを迎えることが、わたしには不快で

あった。わたしは同情などでは迎えられるべくはなかった。わたしは数日後、はっきりとその男にことわりの手紙を書いた」と、人間としての誇りを失わずに人生の選択をした場面が記されている。

普通の女性なら墓場に持ってゆくような身の上話を、城田さんは赤裸々に告白している。自伝を出すことによって、精神的にもきつぱりと売春婦としての過去の自分との決別の儀式を行ったのだと私は思う。そして同時に自分と同じような苦しい立場に置かれていた女性たちに「更生の道はあるから最後まで人生をあきらめないで」というメッセージを伝えたかったのだろう。

魂を削ってまで城田さんが訴えたかったことは、時代の不条理にもみくちゃにされながら不器用に生きるしか術がなかった女性達の悲劇と、売春業の恐ろしさや更生の道の過酷さ、そしてそんな中でも最後まで人

教会の中で政治・左翼的な動きをす

る。「コロニーへの道」には、執拗なまでに売春を憎み、そういったものをこの世界から掃せねばという気概が満ち溢れている。例えば婦人保護施設に入所してもすぐに元の道に戻ってしまう女性達に対して、「売春婦が、そのような状態に陥った原因は、経済だけではないからである。外見は、ことごとく経済にみえる。誰も金に困らなければ、汚らしい男に、身をまかせはすまい。しかし、そうまでして、生きねばならなかった、その背後には、必ず、もう一つの原因がある。能力のなさとか、保護の欠如とか、どこへいっても使ってもらえなかった性格の異常とか……そして、これこそが、本当の原因であって、それを見出しなおさなければ、また元のところに戻ってしまうだけである」と分析している。ここにはある意味、売春婦に対

問の尊厳を忘れずに生き抜いた一人の女の軌跡だった。この城田さんが、戦後70年たつて、日本軍の性奴隷としてプロバガンダに利用されているのだからやるせない。死後もなお政治利用されている城田さんのパネルを一刻も早く撤去し、事実にごくわなかつたと世間に陳謝することこそ、慰安婦問題の運動家たちが城田さんに対して行える最大限の鎮魂ではなからうか。

深津文雄牧師の正体

では、城田さんをいかにも「性奴隷」のように見せかけている「女の地獄」という謎の言葉を、「マリヤ」に記し、2000年に他界した深津文雄牧師とは、いかなる人物なのか。

深津氏は80年に転落婦人の保護と更生活動に貢献した功績を評価され、朝日新聞から朝日福祉賞を受賞している。自伝「いと小さく貧しき

する冷静な視線があり、男の慰み者にされたひたすらかわいそうな受け身の女たちという認識は何えない。深津牧師が一生をかけて取り組み、戦ったのは従軍慰安婦の救済ではなく売春婦の救済だったのだ。

韓国メディアで慰安婦の火付け役

ところが、90年放送の韓国KBSテレビのドキュメンタリー「沈黙の恨」（太平洋戦争の魂、従軍慰安婦）としてNHK国際放送でも放送）を見て、私は再び天を仰いだ。番組冒頭、このようなナレーションから始まる。

「韓国女性史に大きな屈辱を残した20世紀最大の事件、女子挺身隊。日本はどのようにしてこの戦争に韓国の女性たちを強制連行したか。その数は何万人に上ったか。また、彼女たちに慰安婦を強要したのは日本の軍部だったのか、業者だったのか、45年過ぎた今も歴史の真実は沈黙の

者に「コロニーへの道」（日本基督教団）には、売春婦救済のために奔走する半生が書かれているのだが、そこにはこんな記述がある。

「連合軍最高司令官政治顧問が、僕を呼んだ理由は、じつはこうであった。日本の戦争指導者に対する裁判は、日に月にすすみつつある。このましからざる人物の公職追放も徹底的に行われるであろう。しかし、宗教界をどう裁くか、これは難しい問題で、自分としては、やりたくない。だからといって、旧態依然でいられたのでは困る。できれば自主的に改革し、生まれ変わってもらいたい。その発言者になる気はないか」ということだったのである（1946年）」

敗戦の翌年、GHQからこのような申し出を受け、快諾した深津牧師はその後、日本基督教団の総理から「キョウサントウ」というあだ名をつけられ煙たがれるほど、キリスト

中に葬り去られたままです。1930年、日本は韓半島全域に処女会を結成。無垢な少女たちを対象にしたこの会は挺身隊の前身で、その労働力を搾取するのを目的としたものだった。彼女たちは12歳になると処女会に編成された。1939年、いわゆる人間狩りといわれた男女を問わぬ強制連行が全国的に展開された。処女会の会員はもちろん既婚の女性たちも連行された。家族も知らない間に強制的に連れ去られたという。その数はおよそ20万人にも上った。彼女達自身何も知らされることなく送り込まれた先は戦場で、日本軍の●●●（この部分はテープが古く音声聞き取れない）されたのだった」

ここでも城田さんがたびたび登場し、終始穏やかな表情で当時を回顧するのだが、《女の地獄》については話していない。KBSの番組の趣旨からいって、何が何でもこの手の

証言を引き出したかったのであろうが、城田さんは淡々としゃべっているだけだ。沖縄、ミャンマーで生活し、現地で家庭を持った妙に明るい韓国人慰安婦なども登場させ、何だか拍子抜けする作りになっているのだが、最後に深津牧師が登場してこう言うのだ。

ナレーシヨン「シロタさんの人間回復に大きな影響を与えたのは、カニタ婦人養護施設を開いたフカツ牧師でした。フカツ牧師はここで信者となったシロタさんに会い、初めて従軍慰安婦の実態を知ったのでした。フカツ牧師は日本の植民地政策と戦争の二重の犠牲になった女性たちの鎮魂の為に「ああ従軍慰安婦」の碑を建てました」

深津牧師「そして従軍慰安婦と、この中には60%以上、韓国の人が含まれているわけですね。それを私はね、誰も言い出さない、仕方がない、私が日本男子を代表して貴方の

国に「本当に悪いことをしました」と、「今からどうしようもありませんけれども、どうぞ許して下さい」という謝罪の気持ちをは表しているんですね。本当に我々の仲間がバカなことをしたもんだと、今からでも償う方法があったら国家は賠償したらいと言っているんですね。日本でも従軍慰安婦であった人というのはいくら出てこない。韓国の人も「私がそうでした」と、私は探しているんですけど出てこない。貴方知っていますか？」

インタビュアー「知らないんですから今探してみます」

深津牧師「この放送でね、私は探してもらいたいと思うんですね。そしてその、もし会ったら相当お歳でしようけれども、本当にお詫びをしなければいけない。それから、そういうことを知っている人、例えば私の婚約者が連れて行かれたとかね、

自分のお姉さんが連れていかれたとか、そういう記憶がある人あると思うんですね。そういうものをやっぱ黙っていてはいけないというのが私の主張です」

深津牧師が行くあてのない城田さんを救ったのは事実だろう。一方で城田さんを「従軍慰安婦」に仕立てあげたことで、彼女は死後も、性奴隷などという汚名を着せられ、アメリカや韓国においても顔写真入りのパネルでさらし者にされているのだ。このきっかけを作ったのもまた深津牧師なのだ。

最後にたどりついた終の棲家で、過去のすべてを受け入れてくれた深津牧師は、城田さんにとって父親のような存在、いや救世主だったろう。ところがその深津牧師もまた、戦後を生き延びるため占領軍の手先となりウオー・ギルト・インフォメーション・プログラムのお先棒を担ぎ、その後は従軍慰安婦という虚構

の基礎を固めるために城田さんを利用したのではないか。

城田さんの写真や資料を展示している先述の「女たちの戦争と平和資料館」は、城田さんをテーマにしたシンポジウムを開催するなどして日本人女性の「慰安婦被害」を訴えているが、資料館を運営していたパウネット・ジャパンは、主催した「女性国際戦犯法廷」に北朝鮮の工作員を「検事役」として招待したことで北朝鮮とのつながりが指摘されている。そして、資料館理事長の東海林路得子氏の夫、勤氏（日本キリスト教団牧師）も親北派との繋がりが深い。

勤氏は1971年、韓国で北朝鮮のスパイとして革命工作を行って有罪判決（勝は死刑でその後減刑）を受けた在日朝鮮人、徐勝・俊植兄弟の日本国内の支援組織代表を務めていたほか、80年の光州事件では各国の報道関係者を集めて会見を開き、

「韓国兵が妊婦の腹を引き裂いた」「犠牲者は3千人」などと言った虚偽情報を世界に浸透させている（張明秀「徐勝」「英雄」にされた北朝鮮のスパイ）。ベトナム戦争時には米軍脱走兵を匿うという反米活動も行っていった。

その東海林勤氏が理事だった富坂キリスト教センター（TCC）も、発行文書に「沖縄」「天皇制」「慰安婦」などの文字が躍る反日左翼色の強い教会である。しかもTCCの前身であるドイツ教会系の東亜伝導（宣教）会に深津牧師は戦前から関係があり、生前には「かにた婦人の村も、後援会も考えてみるとことごとくが東亜宣教会あつて生まれたものである。どうもありがとう、東亜宣教会」との文章も残している。東海林勤氏と深津牧師の奇妙な接点である。

城田さんの周囲には、こうした親北・反米・反日活動人脈の影が見え

隠れしている。左傾化著しい韓国がアメリカ各地に慰安婦像や碑を建て、日米の離間を図っている現状を思うと、城田さんも政治目的で利用されてきたのではないかの思いを消し去ることができないのだ。

最後に「沈黙の恨」で、「もしも一度生まれかわれたら？」と聞かれた城田さんの言葉を紹介する。「普通の娘さんで普通の……もし、女に生まれたらよ、普通の娘さんで普通の家族に育つて普通の生活して、普通に結婚しておばあさんになって、そいでお孫さんに囲まれて、それで楽しく暮らしたい。それだけよ。それが希望だったんだもの。運命のいたずらでこんなになっちゃったけど、ね。こんなになっちゃった乱万丈の生活送っちゃったけど、でも私、神様ってこと常に頭にあったね」